加藤周一研究動向

福井　優

近年、日本思想史学の分野から加藤周一を単独で論じた博士論文が相次いで発表されており（劉争『「例外」の思想――戦後知識人・加藤周一の射程』現代図書、2021年。久保雄太郎「加藤周一の思想史的考察――その本質と軌跡」東北大学大学院文学研究科2020年度博士学位論文）、加藤周一は本格的な学術研究の対象となったといえる。このような状況を踏まえ、本稿では主として2022年から2023年上半期にかけて発表された加藤論を中心に、最新の加藤周一研究の動向を整理する。なお第Ⅴ部では、主要な加藤論に関して、研究動向と併せて【書評】【論文評】を掲載した。

「雑種文化」論再考

第一に、1950年代半ばに発表された一連の「雑種文化」論の再検討である。「雑種文化」論は、これまでも海老坂武『戦後思想の模索――森有正、加藤周一を読む』（みすず書房、1981年）や、矢野昌邦『加藤周一の思想・序説――雑種文化論・科学と文学・星菫派論争』（かもがわ出版、2005年）などにより精緻な読解がなされてきたが、その蓄積を基にしつつ、改めてその射程を見定めようとする研究が現れている。

そもそも「雑種文化」論は、単なる観照的な日本文化論ではなく、非西洋社会である日本における「個人の尊厳と平等」を原則とする民主主義の実現可能性の探究という、加藤の強い政治的意志に基づく論考であり、戦後思想史を貫く鋭い問題提起を含んでいた。上記の研究動向の背景には、このような「雑種文化」論の性格を踏まえたうえで、現代の日

本やアジアにおける民主主義の将来にわたる構想の手掛かりを、加藤の議論のなかに見出そうとする問題意識が伏在していると考えられる[1]。半田侑子はまずその前提として、「雑種文化」論の成立過程の詳細な検証を進めており、「加藤周一と「日本語の運命」――雑種文化論への過程」（『立命館大学人文科学研究所紀要』133号、2022年）【論文評】では、漢字廃止とローマ字の導入を説いた、加藤の渡仏前の評論「日本語の運命」（1949年）を分析し、それとフランス留学後に発表された「雑種文化」論との連続性を明らかにした。

それに加えて、ルボフスキ伊藤綾「加藤周一と翻訳の問題――日本の戦後知識人作品の翻訳紹介を通して」（『翻訳の文化／文化の翻訳』18号、2023年）は、1950年代の加藤の「翻訳」に対する両義的評価に着目する。そしてその評価が、「雑種文化」論でも問題視された、日本における外来思想の表面的・機会主義的受容に対する警戒に根差しており、かかる視角から加藤の「批評言語の性質」に迫ろうとした。

また「雑種文化」論と加藤のアジア認識との関連性についての研究もある。前掲『「例外」の思想』で「雑種文化」論と『日本文学史序説』における「土着的世界観」との関係性について論じた劉争は、「加藤周一思想における中国の時間と空間」（『孫文研究』70号、2022年）で、「雑種文化」論及び『日本文学史序説』に見られた「「時間と空間」へのこだわり」が、その独自の現代中国論にも反映していると指摘した。

思想形成期の実証的研究の進展

第二に、「雑種文化」論よりさらに遡り、戦前・戦中期における加藤の思想形成を詳細にたどる実証的研究も進んだ。山辺春彦・鷲巣力『丸山眞男と加藤周一――知識人の自己形成』（筑摩選書、2023年）【書評】は、丸山・加藤両文庫の資料を駆使しつつ、これまでの両文庫の共同展示も踏まえたうえで、同時代人である丸山と加藤それぞれの敗戦までの生い立

ちを詳細に描く評伝的研究である。今後、さらなる進展が期待される加藤と丸山の比較研究において、基礎的な文献となるにちがいない。さらに同書では、加藤と丸山の自己形成における母の重要性が示唆されているが、この論点を深化し、よりそれぞれの母のパーソナリティに焦点を当てる研究として、半田侑子、ルボフスキ伊藤綾、井上裕美、翁家慧による共同研究「近代日本知識人の「母」――丸山眞男・加藤周一・鶴見俊輔の母たち」が現在進められており、その成果が待たれるところである[(2)]。

その他に加藤の思想形成にとって重要な事件である、一高国文学会主催の座談会における横光利一との論争に関連する研究として、鷲巣力「壮大な挑戦と平俗な蹉跌――加藤周一が見た横光利一」（『横光利一研究』21号、2023年）【論文評】を得た。同論文は、加藤の横光論を通じて、横光が戦争に協力していく要因を批判的に検証している。

以上の研究を進めるに当たっては、加藤についての新出資料の調査・紹介も重要となろう。敗戦直後の加藤の広島体験にかかわる新出資料として、ウィーンのジャーナリスト、ユーディット・ブランドナーによる、2004年の加藤へのインタビュー記録の一部を翻訳した「加藤周一が語った日本――南京・広島・憲法九条」（『日本思想史研究会会報』39号、2023年）が出された。また加藤文庫所蔵の音楽関係者からの書簡などを整理した西澤忠志「加藤周一文庫における「音楽」関連史資料について　付――加藤周一宛別宮貞雄書簡」（『関西美学音楽学論叢』7巻、2023年）を得た。

小説家としての加藤周一

第三に、これまであまり論じられてこなかった加藤の小説作品への着目である。岩津航は、1940年代後半から1950年代半ばの加藤の小説を分析対象のひとつとした『レトリックの戦場――加藤周一とフランス文学』（丸善出版、2021年）に続き、「小説家加藤周一の賭け――『神幸祭』

を読む」（『金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇』15号、2023年）で、新たに九州の炭鉱における労使対立を描いた加藤の最後の長編『神幸祭』（1959年）を取り上げた。同論文は、『神幸祭』に見られる、「二項対立とはまた別な契機」を探ることによって、現実的な解決の方途を見出そうとする加藤の姿勢が、現実政治についての批評にも表れているとして、小説と批評双方から文学者としての加藤の評価を試みた。

なお加藤の後期の小説については、彭佳紅「加藤周一の「時間」における構築――短篇小説集『幻想薔薇都市』を深読みして」（『東アジア比較文化研究』20号、2021年）がある。世界各地の13の都市を舞台に女性との愛を描く『幻想薔薇都市（まぼろしのばらのまちにて）』（1973年）は、「起承転結」という時間軸によって構成されており、したがってこの作品は、「旅人」としての加藤のそれまでの経験を文学に昇華させたものであり、加藤が「新たな人生＝「時間」を始めようと決意した〔……〕「記念碑」的な一冊」と意義付けた。

小説作品を論じたものではないが、加藤の文学論にかかわる研究として、渡辺一夫を媒介として始まった大江健三郎と加藤との文学的交流を論じた、半田侑子「大江健三郎とそのミクロコスム――加藤周一を手がかりに」（『ユリイカ』55巻10号、2023年）を得た。なお加藤の文体を詳説した鷲巣力『書く力――加藤周一の名文に学ぶ』（集英社新書、2022年）も刊行された。

最後に、加藤の一休論について考察する研究も発表された。戦後日本における一休像の形成史を描いた飯島孝良『語られ続ける一休像――戦後思想史からみる禅文化の諸相』（ぺりかん社、2021年）は序章・終章で加藤の議論についても触れる。加藤の一休論は、「悟りや詩作やエロスを通して内的経験の絶対性を自覚しながら、あくまで仏教者として伝統的戒律に留まる一休」の「矛盾」に焦点を当てるものであったとし、この一休像には、現実社会と自己の内面との間で矛盾を抱える戦後知識人・加

藤自身の姿が投影されていると指摘する。

また同書は結論において、これからの一休研究の方向性として興味深い提言をしている。それは「諸分野に精通して社会と時代に真正面から対決を挑んだ一休を探究する」には、仏教学や禅学だけでなく多様な研究領域を総合する研究枠組である「一休学」の構想が求められるとするのである。これは今後の加藤周一研究にとっても重要な指摘ではないだろうか。そのためには加藤文庫としても、文庫所蔵の資料の活用をより促進する環境作り（具体的には資料目録の整理・公開など）が必要であろう。

註

(1)　加藤の思想の現代的射程を巡る様々な論点については、三浦信孝・鷲巣力『加藤周一を 21 世紀に引き継ぐために――加藤周一生誕百年記念国際シンポジウム講演録』（水声社、2020 年）、『『加藤周一を 21 世紀に引き継ぐために』合評会記録』（立命館大学加藤周一現代思想研究センター、2022 年）を参照。

(2)　共同研究の中間報告として、『加藤周一現代思想研究センター報告』準備号（2023 年）に、半田侑子「近代日本知識人の「母」――丸山眞男の母、セイを中心に」、劉争「織子と「母」と「女性的なもの」」、本誌にルボフスキ伊藤綾「近代日本知識人の「母」――鶴見俊輔とその母」、半田侑子「近代日本知識人の「母」――加藤周一の母・ヲリ子と「無限の愛情の中心」」が発表されている。

（ふくい ゆう　立命館大学大学院文学研究科博士後期課程）